

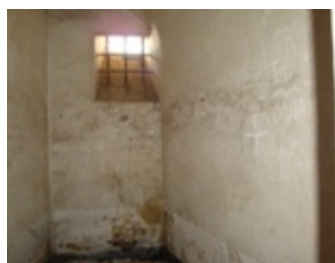
2008/9/13(土) 午前 9:59

無題

練習用



0



ここは、プラハから北へ5.6十キロメートル離れたところにあるテレジン強制収容所跡です。

このテレジンはもともと、皇帝ヨーゼフ2世が18世紀にオーストリアとプロイセンの戦争の時にプロイセンのチェコへの侵入を阻止するために作られたそうです。名前は時の女帝、マリア・テレジアからとったそうです。

入口の前の広場は大きな墓地になっていました。(写真1)

この墓地を右側にずーと歩いて行くと白と黒に塗られた正門に行きつきます。

(赤いレンガ色の塀に白と黒の配色が異様に感じられました。私だけかもしれませんが…) (写真2)

正門を入り左に行くと、まず目にとまるのが、
「ARBEIT MACHT FREI」という文字。

「労働は自由をもたらす」という意味。ここに連れて来られた人々はこの言葉を信じて中に入っていたのでしょう。ここをくぐると、第一中庭がありAとBのブロックに分けられ17の監房と20の禁固独房には終戦直前には1500人が収容されていたそうです。一つの監房には3段ベッドがありました。ベッドの反対側にはそれぞれのお皿、スプーン、洋服、靴を置く細長い置物があり、洗面台、板に穴をくり抜いただけのトイレがあり、400人から600人がこの部屋に収容されていたと聞いてどうやって600人が入れるの？」とビックリでした。ストーブは最初の2年間だけ、あとはなかったそうです。(写真3)

この収容所から脱出しようとした二人が石で拷問され処刑されました。

処刑が決まった人はこの部屋へ入れられ、食料なし、洋服なし、バケツ一つを与えられていました。この部屋は窓がありますが、窓の無い部屋がいくつかありました。本当に真っ暗で、鳥肌が立ちました。壁には十字架や文字が沢山書かれていて、想像以上の恐怖を感じました。(写真4)

500メートルの隠れ通路(地下道)を歩いていくと、そこは射殺場に通じていました。これは「死の門」といい、このトンネルをくぐる者の運命は射殺場へとつながっていました。射殺場には当時の銃弾の痕が残っていました。そして近くには絞首台があり、3人の処刑がされたそうです。本物を見たのは初めてで、思わず後ずさりしてしまいそうでした。

このテレジン収容所の見学で感じたことは、今の私たちの価値観などでは説明、理解できないことが日々繰り返され、罪もない弱い人たちが理由なく殺されていく。狂った時間の中で彼らは何を「生きる意味」と考えていたのだろうか？ロゴセラピーを勉強してきて、今までわかったつもりでいた自分が何だか恥ずかしく思えました。

もう一度、少しでも彼らに近づけるようにロゴセラピーを勉強したいと思いました。(K.N.記)